

司馬遼太郎



街道をゆく十八

街道をゆく

司馬遼太郎

朝日新聞社

昭和五十七年七月 十日 第一刷発行

街道をゆく 十八

定価 一二〇〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 初山有恒

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五―三―二
電話 〇三―五四五―〇一三(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

©司馬遼太郎 一九八二年

街道をゆく

十八

本書は「週刊朝日」昭和五十五年十二月十二日号・連載第四百七十一回から、五十六年六月十九日号・第四百九十七回までを収録。

目次

越前の諸道

越前という国

足羽川の山里

薄野

道元

7

21

35

49

山中の宋僧

63

宝慶寺の雲水

77

寂円の画像

91

越前勝山

105

白山信仰の背後

119

平泉寺の盛衰

135

衆徒の滅亡

149

菩提林

161

木洩れ日

173

永平寺

187

松岡町

201

一條兼良の莊園

213

将棋

227

丸岡城趾

239

福井平野

251

紙と漆

265

下流の畔

277

三国の千石船

291

丹生山地のふしぎさ

303

越前陶芸村

315

古越前

327

頑質

339

重良右衛門さん

351

題字 棟方志功

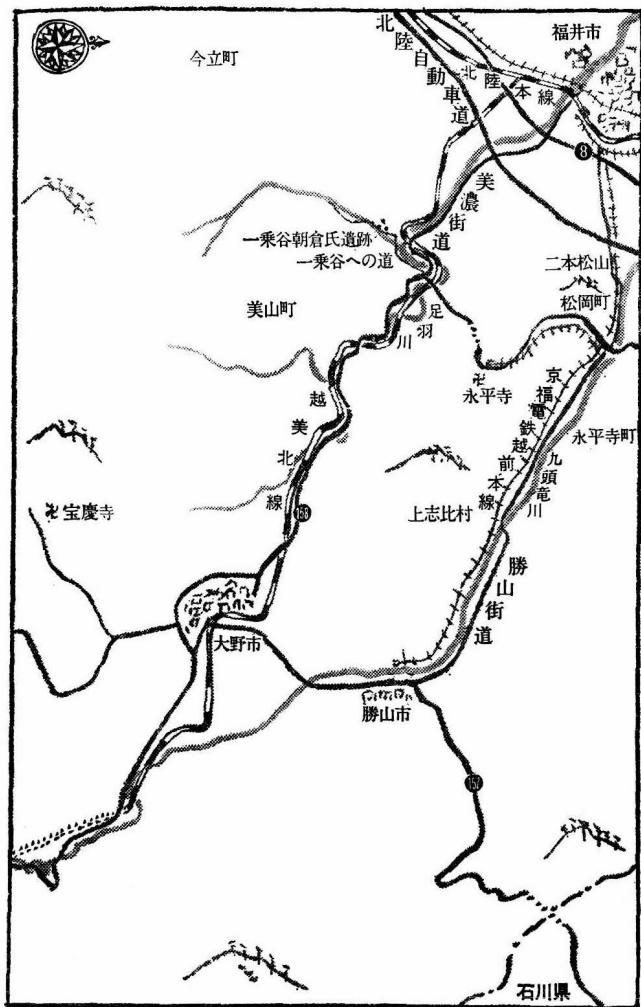
え 須田剋太

装幀 原弘

地図 熊谷博人

越前という國





かねがね越前の九頭竜川^{くづりゅう}ぞいを上下してみたいとおもっていたが、この秋十月のはじめ（昭和五十五年）、須田画伯をさそって、念願を遂げることができた。

ひさしぶりで大阪駅へ行ってみると、旧観とはちがっている。駅舎の新築工事中で、プラットフォームだけが削きだしのまま稼働しているという感じだった。

須田画伯は相変らず待ちあわせ時間に律儀^{りぎぎ}で、約束の時間の三十分前にきてベンチで待っておられた。

画伯とは、春、夏ともに会っていない。二月はじめての島原・天草の旅以来である。

「こんどは、越前ですね」

口をすぼめ、掌を上下された。指が根竹のように節くれだって異常なほどにたくましく、いかにも画家の掌にふさわしかった。

やがて十二時五分発の「雷鳥」十五号が入ってきた。これに乗れば、福井へは十四時二十三分につく。

途中、食堂車でサンドウィッチを食っているとき、列車がすでに湖西線を走っていることに気づいた。琵琶湖の西岸のこの線が開通したのは昭和四十九年七月二十日ときいているが、私にははじめてである。列車の右は琵琶湖の水景で、左が比良山系になる。山勢^{さんせい}がにわか^ひに退い

たり、あるいは押し寄せたりして、さまざまに変化した。

湖東の野はものやわらかだが、湖西の景色は、ややけわしい。

比良山系は、鉄道に並行している。列車からは見えないが、この山系のむこう麓を安曇川が流れており、それに沿って朽木街道という上代以来の古道が通っている。私どもは、十年前、この『街道をゆく』で最初にその朽木街道を旅した（第一巻）。画伯は、濃いスープを飲みながら、そのときの話をした。

近江今津駅を通りすぎたとき、朽木街道の端っこを見た。この古街道は今津で湖畔に出、さらに北にのぼってゆく。湖畔の海津駅——湖西線ではマキノ駅——の北方の山中に、愛発の古関趾がある。上代、この関は、畿内政權と越の勢力の境界線であった。畿内勢力が安定した平安初期、延暦八年（七八九）になってようやく廃止されるのである。それまでは、畿内にとって北陸道（越の国）は、油断ならぬ世界であつたろう。

『日本書紀』に、継体天皇というふしぎな存在が出てくる。

この人はいまの福井県（越前）に住んでいた。越前の伝承では九頭竜川、足羽川、あるいは日野川の流域平野を大いにひらいて農業生産をあげたという。その在世は五世紀から六世紀にわたっている。越前の古墳文化でいえば、旺盛なエネルギーをもって中期古墳が無数に造営さ

れつつあった頂点（もしくはそのエネルギーの末期）にあたる。

名は男大迹王（もしくは彦太尊）とよばれた。おそらくかれは、富強であったであろう。

この勢力家の正体については『日本書紀』は応神天皇五世の孫であるという。実父はいまの湖西線ぞいの滋賀県高島郡にいたともいう。実際はどうであったかわからず、そういう由緒は当時でもつくることができるのである。たとえかれが五世の孫であったとしても、五世代も経って、しかも父が湖西の草ぶかい高島の地にいたという程度ならば、地下の者とさほどかわらない。

ときに倭政権は前代の血が絶えた。

そこで、有力な豪族たちが、はるか越前（当時、越前という呼称はなかった）の地にいる人物をかつぎ、畿内にまねいて天皇になってくれることを望んだという。『日本書紀』によると、男大迹王はすでに五十七歳になっていた。手腕、勢力、思慮すべてが成熟しかった年齢といっている。

かれはその擁立運動に応じ、おそらく大軍をひきいて越前から出てきたが、ふしぎなことにすぐには大和盆地に入らなかった。淀川ぞいをくだってこんにちの京阪沿線の樟葉（いまは楠葉）でとどまり、そのあとその付近で三カ所を転々しつつ、二十年も経ってからやっと大和に

入り、磐余いわれみよに宮居みやいした。おそらくこの間、大和盆地や諸方の豪族の出方を見たり、政治工作をしたりしていたに相違なく、このことを見ても、よほど慎重な性格の人物だったと思える。

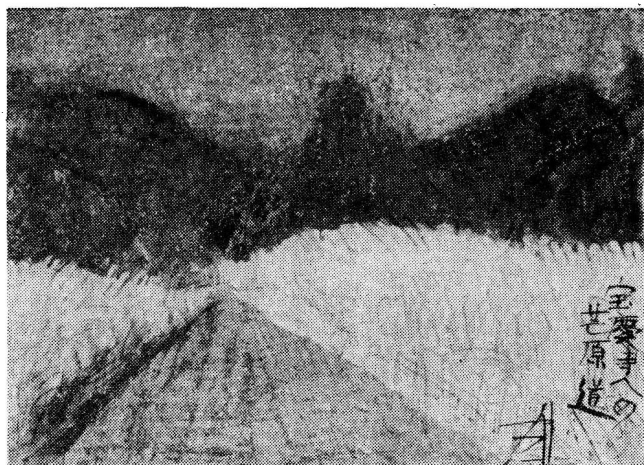
継体天皇に関する疑問の研究については、戦後になって大いに評価された喜田貞吉「継体天皇以下三天皇皇位継承に関する疑問」(昭和三年)や林屋辰三郎「継体・欽明朝内乱の史的分析」(昭和二十七年)といったすぐれた論文があり、ここではことさらにふれない。

ともかくも六世紀初頭において越前人が、その勢力をひきいて倭政権の首長になったということは、その後あまり冴えなかった越前という地の日本政治史上の位置から考えて、尋常ならざるできごとといっている。

このことは、古墳時代中期の越前の地が、他の先進、後進の地方にくらべ、農業生産や鉄器生産、あるいは灌漑土木が沸わきたつほどにさかんだったのではないかということを想像させるのに十分なようである。

古代、 「越」

といわれた地域は、いまの福井県あたりから新潟県信濃川の線までおよんでいる。高志こし、古志とも表記された。



「角鹿^{つるが}（敦賀）の坂（木ノ芽峠であろう）を東に越えて入る地域であるために、越^こという」

と室町期の一條兼良^{かねら}（一四〇二～八一）がいったという。そのくだりは谷川士清著の『書紀通証』にみえる。

木ノ芽峠はそれほど越えがたかったし、このため越は畿内の文化からみて、ひどく遅れていた。

越というのは蝦夷語で、その一民族をさす呼称が、地域名になったのだろう、というのは、吉田東伍博士である。喜田貞吉博士の説も、その基盤の上に立っている。

上代史という蝦夷^{えぞ}とは「アイヌ」といったような限定した呼称ではない。海外から水稲を持って入ってきた弥生式文化のひとつが、九州、中国、畿内に勢力を占め、稲作生産が宗教になり、政治になり、軍事にもなっていくが、その文化に

従わぬ先住者——多分に採集生活者であろう——を「まつろはぬ者ども」と言い、そのうち北陸に住む者を蝦夷とよんだのだろうか。

そのうち、倭政権の「稲作のすすめ」が北陸道に及ぶのが、五、六世紀、継体天皇の成立よりすこし前のことであろう。倭政権の可視世界がひろがるにつれ、このころには、出羽や北海道あたりまで「越」とよばれるようになったらしい。

越が、

「越前、越中、越後」

にわけられて、倭政権の重要な構成地域になるのは、継体天皇成立（五〇七）よりずっとあとの七世紀半ばになってからである。

ついでながら、越のなかでのちに「加賀」（石川県）とよばれる地は、はるかな後世、室町時代によくやく穀倉の地になったわけで、古代はあまりふるわなかった。いま石川県にある古墳の九五パーセントまでが後期古墳であることを見ても、その開発が遅れていたという想像がなりたつ。継体のころは、のちの呼称でいう越前に付属した地域であった。

『日本書紀』におもしろい記述がある。継体の成立から六十三年のちの欽明天皇三十一年（五七〇）、現在の北朝鮮日本海岸を出航した高麗（高句麗）の使節船が、風に流された。本来なら、